日本個性化教育学会
日本個性化教育学会報
第４０号

発行
2023 年 5 月 14 日
発行責任者
加藤幸次

個に応じる指導・自律的な学び

信州大学 教授　伏木久始

私が「個に応じる教育」にこだわるようになったのは、大学院修了後に教育センターの教育相談員という心理職に就いたことが強く影響しています。当時は「登校拒否」というカテゴリーに括られていた中学生やその保護者を相手にカウンセリングなどを担当していました。

1980 年代は「金八先生」等の熱血教師ドラマが高視聴率を得る時代だったこともあってか、教壇から全員に熱く語りかける一斉指導で学級の子どもたちの「心を一つにまとめる」ことのできる教師が、一目置かれる雰囲気がありました。しかし、登校時に自宅のベッドから起きてこられない生徒のことで担任と情報交換するために学校訪問すると、意外なくらい多くのケースで学級経営に熱心でファイトあふれる先生が担任教師だったことが私には衝撃でした。

「一人がみんなのために、みんなが一人のために」というスローガンはラグビーなど高度な集団プレーが求められるチーム内で共有されることが多いですが、たまたま同じクラスになった多様な子どもたちの居場所であるはずの学級が、唯一の方向に結束することを強要される場になったら、その圧力に耐えられなくなり、違和感や孤立感を深めて逃げ出したくなるのもわかる気がします。自分と違うタイプの個人がいて、そういう人を排除しないという意味でのみ、“みんなが一人のために”は許容されるべきだと思います。授業の在り方も同じではないでしょうか。

しかし、「個に応じる指導」は何のために行うのかという目的意識を欠くと、その子が本来もっている好奇心や主体性を奪い、自己教育力を弱めてしまうことに気づいたのは、いったん教師を辞めて再び大学院で学び直した時でした。

先回りしてレールを敷き個別に手をかけて学び方まで教え込み、その子にふさわしいと見立てた学習課題を与え続けると「できた」という学習体験を味わうことがあるかもしれませんが、その子の主体性は育まれず、自力で問題解決する経験知も蓄積されません。そうであれば、その子が選択する前に与えてばかりの指導よりも、自分の学びを自分でつくれる力を高めるような支援や、試行錯誤できる学習体験を重視することのほうが大切なのではないかと思うようになりました。

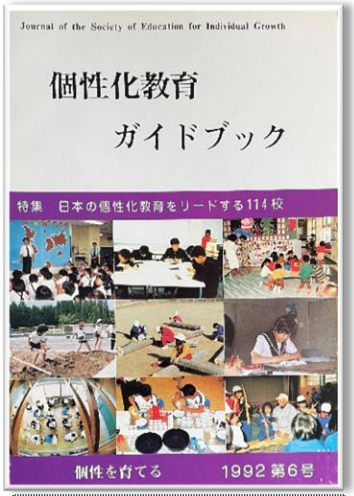
一人一人の“個”に応じながら、自律的な学びを展開できる子どもを育んでいくための仕事に、私は今後も力を尽くしたいと思っています。

東京事務局
学習会報告

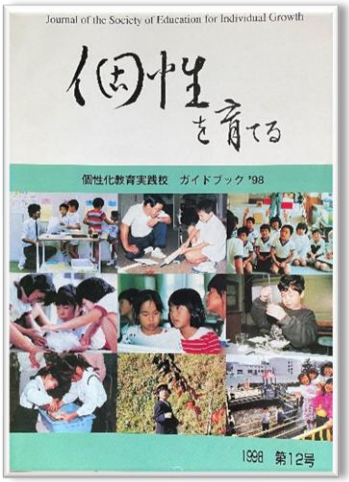
テーマ：「自身の個性化教育の歩みを語る」

創造、継承、そしてこれから先へ

個性化教育を側面から
支えてきた会誌



第 6 号 1992 年発行
日本の個性化教育をリードする全国１１４校を掲載



第１２号 1998 年発行
個性化教育実践校１０４校を掲載

温故知新・個性化教育の潮流を顧みる

本学会は、前身である「全国個性化教育研究連盟」の発足から数えると、来年で４０年となります。

「子どもの個性を育てる」ために、「指導の個別化」「学習の個性化」にもとづく実践研究を続けてきました。このたびの中教審答申『令和の日本型学校教育』で示された「個別最適な学びの実現」については、ようやく時代が追いついてきたと感じています。

何事もそうですが、未開地で大きな志と情熱によって初期につくられたものは完成度が高く、後進にとっては一つの具体的な目標となります。幸いなことに本学会には「個別最適な学びの実現」に通じる実践研究を行ってきた先達がたくさんいます。

そこで３月の学習会では、会発足以来ずっと東京事務局を支えてくださっている３人の先生方に、当時のエピソードも交えながら選りすぐりの実践事例を紹介していただきました。

当初の学習会コンセプトは「温故知新」でしたが、発表を聞いて古さは微塵もありませんでした。むしろ、今でも変わらない一斉授業の実態をどう捉えるべきかを考える機会となりました。また、従来の教師の仕事を AI が担えてしまうのだとしたら、私たちはプロとして何ができるのか。一人ひとりがこのことを自覚して思案しながら授業をつくり、実践をかさねることが求められていると思いました。

個性を育てることは、個別最適な学びの実現とともに「多様性と包摂」「自立した学習者の育成」「子どもの学習権保障」とも結びついています。先がみえない複雑さだからこそ、創意工夫のやりがいがあります。これからも、様々な知恵を出し合い交流できる機会と場をつくっていきたいものです。

（東京事務局・佐野）

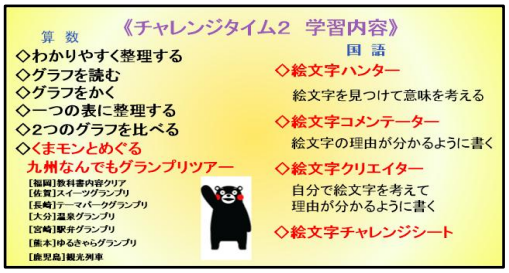
東京事務局
学習会報告

テーマ：「自身の個性化教育の歩みを語る」（1）

私の個性化学習プログラム

五十子　晴美

◇実践時・実践校　1997-8 年　（台東区立大正小）
2010-13 年（台東区立東泉小）
2016-17 年（福岡県志免西小）



個性化学習プログラムを実践するにあたって大事にしている思いがあった。

○本物の体験・体感・生活に生かす	○子どもと一緒に作る学習（活動・環境）
○その子どもたちのための学習プログラム	○アドバイスのタイミング

こうした思いをもとにした実践を紹介する。

（１）総合的な学習－５年「大正和紙」

この実践では工房単位で活動し協同組合を作って話し合いを大切にした。活動が進み子ども達の意欲が高まると本物を目指すようになった。同じ内容のアドバイスでも子ども達に響くタイミングがあるということを実感した。

（２）マイプラン学習（単元内自由進度学習）

①「自然を生かしたくらし」５年社会

雪の上ではかんじきをつけると歩きやすいことを体験した。雪の代わりにシュレッダーした紙を利用。活動後、散らばる紙を子ども達が進んで片付けるようになった。

②「武士の世の中」６年社会

茶道の体験をした。茶道での所作にも意欲的に取り組み、どの子も楽しそうに活動した。

③「島のくらし」４年社会

日頃学習意欲がなくテストも白紙で出すことの多いＡ君が、この学習には意欲的でテストも進んでやった。「おれって天才？」うれしそうな笑顔が印象的。自信がつきその後白紙で出すことはなくなった。

茶道体験

（３）チャレンジタイム（単元内自由進度学習）
＜福岡県志免西小さくらんぼ４組にて実践＞

①　「重さ」「表とグラフ」（３年算数）

以前に実践した「重さ」の成果と課題をもとにこのクラスの子ども達の好きな鉄道に特化したオリジナルの学習プログラム。自分のペースで楽しんで取り組んでいた。

②　「表とグラフ」（３年算数）

地域に根ざした話題で 実生活につながるリアルな学習をめざした。自主的にアンケートをとり集計してグラフにあらわすことができた。

東京事務局
学習会報告

テーマ：「自身の個性化教育の歩みを語る」（2）

「学校を開く・子どもを開く」

佐久間　茂和

◇実践時・実践校　1983-1989　目黒区立宮前小
1989-1995　台東区立精華小
2002　台東区立台東小

『オープン＝子どもを開く』
①教師主導の授業を開く
②教室の壁を開く
③教師の壁を開く（学年・学級の壁を開く）
④教材を開く(情報を開く)
⑤時間を開く
⑥教科の壁を開く
⑦地域に開く

１．緒川小学校に行かなくてもよい学校づくり

個別化・個性化教育との出合いは、４０年前、緒川小学校の学校公開である。とんでもないことをしていると衝撃を受け、個別化・個性化教育への道を踏み出した。

加藤幸次先生のご指導も受けて、「緒川小学校に行かなくても良い学校づくり」を目指して、目黒区立宮前小学校での実践が始まった。算・国・音・図・体の５教科「のびっこ学習（はげみ）」を始め、４教科の週プロ、総合学習、選択学習等、多くの実践を展開した。オープン教育を『従来の教育の閉鎖性を開く』『子どもを開く』と捉えた。

２．多様な個別化・個性化への挑戦と「ほぼ学年合体ＴＴ」

台東区立精華小学校では、「２教科の週プロ」「調べ学習」「総合学習」「自由研究学習」を実践多くの教科を学年ＴＴで実施し、朝帰りの会、給食、係活動も一緒にした。

３．管理職として「総合学習」に力を入れる

教頭になり、当時新しい教育として教育課題だった「総合学習」に力を入れた。大正小学校では、奈須正裕先生のご指導で「都会型の総合学習をつくる」として、多様な総合学習（生活科）の実施を支援した。台東小学校では、個人総合や生活科の推進と百名程度の小規模校の特徴を活かした「全校総合」も実践した。

４．「ロマン・スタッフ・カリキュラム」への思いと校長としての反省

校長になると、校務事務システムのモデル校等、多く責務が課された。また、長年の課題だった「校内研究の改革」に挑戦して校内研究を進めたが、成果を挙げなかった。ＩＣＴの活用だけは一貫して力を入れ、継続して推進したが、ＩＣＴの充実だけでは、授業改善、教員の意識改革には不十分であった。他の教育改善と関連付ける必要があった。ＩＣＴ活用の力を過信しすぎたのも「宮前小再び」から遠ざかった要因の一つかもしれない。

「ロマン・スタッフ・カリキュラム」は、個性化教育を推進するポイントとして、長い間大事にしてきたことだが、これをストレートにぶつけるべきだったと反省している。

加藤先生が始められ、ご指導されてこられて、私たちが実践してきた教育が「今の時代に参考になる」のは、この教育が時代を先取りしていたからである。やっと、時代が追いついてきたとも言える。私（たち）の話が「過去の人」ではなく「個性化教育の実践者の一人の話として」少しでもお役に立てば幸いです。

東京事務局
学習会報告

テーマ：「自身の個性化教育の歩みを語る」（3）

個人差に応じた指導の工夫

中澤米子

◇実践時・実践校
1985-7 年（台東区立根岸小）

今から、約 38 年前のことである。
本校は（根岸小）は、文部省から『個人差に応じた指導の工夫』をオープンスペースで展開するよう研究指定を受けた。文部省が指定した本校の講師は上智大の加藤幸次先生である。

（1）学習形態・指導計画、そして、研究組織の改編

そもそも、個人差に応じる指導とはどのように指導なのか。
当初は、皆目分らなかった。当時、全国には優れた授業も多数あったが、すべていわゆる一斉授業である。そこで、加藤先生のご指導のもと、「個人差とは何か」を捉え直し、それに応じる学習形態や指導計画、さらには校内の研究組織をも抜本的に見直した。ここでは、子どもの興味関心に応じた実践の一つ、「課題選択学習」について紹介する。

（2）課題選択学習「いろいろな土地のくらし」（4 年）

個人差とは
- 達成度（狭い意味での学力）
- 速　度（学習時間）
- 適　性（学習スタイル、認知スタイル、持ち味）
- 興味・関心（すき　きらい）
- 生活経験

この単元の従来の学習方法は、一般的には、順番に①低地のくらし②高知のくらし③寒い地方のくらし④暖かい地方のくらしを一斉に学習していく。しかし、ここでは子どもの興味関心を生かす方法として、③と④を課題選択させて学習に取り組ませた。

一つの課題を選んで学習するということは、他の課題を学習しないことになる。38 年前の当時として、勇気のいる学習方法であったが、子ども達は、むしろ意気揚々とオープンスペースで学習を進めていった。子どもの学習を側面から支えるために、学習環境も整えた。特にオープンスペースを半分に分け、暖かい地方と、寒い地方の雰囲気が感じられる学習環境を構成したのは効果的であった。雪国の子どものようにこたつでも真剣に学習する姿は微笑ましかった。

沖縄守礼の門の前に、砂糖キビ、イナップルなどが並ぶ

雪国のかまくらの前にわらぐつ、かんじき、リンゴなどが並ぶ

（3）自ら選択する力を育てる

日本人は、「自ら選択する力」が欠けていると言われる。それは小さい時から、「自分で選択する必要がない」ように仕組まれた学習のレールの上を歩かされていることに起因しているのではないか。この学習を通して、子どもたちは、「自分で選択し追究」する経験ができたと思う。

◆こんな授業をつくってみました

個別最適な学びを実現する英語の授業

（中３年・英語）

愛知県東浦町立北部中学校　横山　稔史

１　授業改善の見直しのきっかけ

英語の授業をイメージしてください。英語での挨拶に始まり、教師が身振り手振りを交えながら英単語や英文を生徒にリピートさせたり、英作文に取り組ませたりする様子をイメージした方が多いのではないでしょうか。そして、授業の終わりは英語の挨拶で締めくくり、強制的にシャットアウトさせられる。私自身、中学生の時にこのような授業を受けてきたので、学校の英語の授業というものはこういうものだと思っていました。

しかし、へき地での勤務経験が私の中の指導観や教育観を変えてくれました。これまでの一斉指導が全く通用しないと肌で感じました。へき地の生徒は人数が少ないので、一人一人に手厚く教え込むことができると思っていましたが、生徒一人一人のペースがあり、授業の内容についていける生徒もいれば、そもそも何をしてよいか分かっていない生徒もいることに気付かされました。人数が少ないからこそ一人一人がよく見えるので、実感したのだと思います。これまでもそういう生徒がいたことに気付いていましたが、教える側の都合で授業を進めてしまっていたと深く反省させられました。授業の主役は生徒であり、教師ではない。そう考えるようになり、一斉授業に限界を感じ、個を生かした授業づくりを目指すことにしました。

２　単元内自由進度学習の取組

New Horizon3 Unit5 “A Legacy for Peace”の授業実践を紹介します。単元のはじめにオリエンテーションをします。単元構想が書かれたプリントを全員に配付し、単元の GOAL を伝えることで、まずは見通しをもたせます。「単元の終わりには、〇〇な考えや意見が伝えられるようになっていたり、〇〇ができるようになっていたりするといいね」とだけ伝え、あとは生徒一人一人がそれぞれの目標に向かって学習を始めます。教師が一斉に話す場面はオリエンテーションだけです。私は、一斉に英単語や英文をリピートさせたり、英作文に取り組ませたりはしません。オリエンテーションで、きちんと単元のねらいを伝えたら、あとは生徒の活動に委ねます。

オリエンテーション直後の生徒の様子を紹介します。生徒Ａはタブレット端末で教科書のＱＲコードを読み取り、単語の音声を確認していました。生徒Ｂは教科書の英文の内容を日本語にしていました。生徒ＣはUnit5 の新出文法を確認するために、私が事前に用意した解説動画を、タブレット端末を使って確認していました。

このように、一人一人が自由に選択して自分のペースで取り組んでいました。その間、私は生徒の様子を観察しながら、教室内を歩いています。ついついよかれと思って口を挟みたくな

る時がありますが、じっと我慢しながら生徒の主体的な姿を見守ります。そうしていると、先ほど新出文法の解説動画を視聴していた生徒Ｃが「質問があるのですが」と私に声をかけました。質問に答えると、生徒Ｃは「ありがとうございます」と言って、また自分の学習に没入します。一斉授業だとこのように質問したくてもできないことが多々あると思います。自由進度学習を取り入れたことで、質問しやすい環境が生まれたともいえます。

さて、教室内を歩いていると、何も手を付けていない生徒Ｄがいました。そういう生徒にはこちらから声をかけます。「大丈夫？」と声をかけると何をしたらよいか分かっていない様子でした。そういう生徒には個別の支援が必要になってきますが、私は「〇〇をやりなさい」とは伝えません。まず、生徒自身に自分の課題に気付かせる問いかけをします。「この英文、日本語にできる？」と聞くと、生徒Ｄは首を振ります。「じゃあ、この単語の意味は分かる？」と聞くと、同じように首を振ります。「じゃあ、まずは何をしたらよいかな？」といったやり取りをし、生徒自身がやるべきことを把握した上で、「やってみよう」と後押しをします。

一斉授業をしていた頃、寝てしまう生徒がいました。今思うと、そういう生徒は教師が何を言っているのか理解できないし、何をしてよいのか分かっていないから寝てしまうだけで、決してサボろうとしていたわけではなかったのだと気付かされました。自由進度学習を取り入れたことで、生徒Ｄにもスポットライトを当てることができるようになりました。

３　探究活動の取組

自由進度学習の内容の中に、自分の理解度を図るためのセルフチェックテストを用意しています。いくつか用意してあるセルフチェックテストを終えた生徒は、私のところに報告に来ます。

自由進度学習を終えた生徒が次に取り組む内容は探究活動です。自由進度学習で得た「知識・技能」を自分に合った方法でまとめます。Unit5では、平和や人権の大切さを考えることが目標にあります。また、関係代名詞を使うことができるようにすることも目標にあります。それらを踏まえて、どんなことを探究するのか、まずは生徒に問いかけます。そして、探究活動を単純にまとめの活動にはしたくないので、私はアウトプット先を大事にしています。せっかく探究した内容を教室内の発表で終わるのは勿体ないと感じているからです。

例えば、生徒Ｅは探究した内容をレポートにまとめました。それを学級の発表で終わりにするのではなく、実際に海外に住んでいる人にメールで送りました。アウトプット先が実際に海外の人と知った生徒は、さらに主体的に活動しているように感じました。また、生徒ＦはUnit5に登場するガンディーの生い立ちを演劇にし、動画にして発表したり、生徒Ｇはスライドを使って発表したりするなど、自分に合った方法でアウトプットしていました。

４　おわりに

今年度、自由進度学習と探究活動の２本柱で授業改善をしてきました。次年度はこれらに加え、帯探究（会話活動）を導入していくつもりです。会話活動をしていく中で、生徒は課題（会話が続かない等）に気付き、それを解決するためにはどうしたらよいかをみんなで考え、共有し、課題解決に向けて取り組む活動にしたいと考えています。そうすることで、生きた英語につなげていけたらと考えています。

本の紹介

日本個性化教育学会会員の著書を紹介します。全国の先生方の教育実践や研究をサポートする良書です。

社会科 「個別最適な学び」 授業デザイン理論編	社会科 「個別最適な学び」 授業デザイン実践編	算数 「個別最適な学び」と 「協働的な学び」の一 体的な充実
宗實　直樹　著 明治図書　2486円	宗實　直樹　著 明治図書　2310円	加固希支男　著 明治図書　1936円

◇研究会・・関西個性化教育学会学習会（オンライン）７月２２日（土）18：00～20：00

テーマ「Steam からこれからの教育実践を考える」

提案者　石野亮先生（加西市立北条東小）村口飛鳥先生（大阪教育大学附属天王寺小）

申し込み　中西徳久〈to.nakanishi@edu.nishi.or.jp〉

◇授業公開案内・・愛知県 緒川小学校授業公開日　６月 26 日（月）10：00～15：30

申込みは、事前に緒川小ＨＰへ。緒川小(schoolweb.ne.jp)

◇東京事務局より・・3 月 25 日（土）、東京事務局学習会が開催されました。当日の発表は、今、実践されている先生方の参考になるのではということで、当日の発表資料を提供することにいたしました。学会のＨＰ「https://koseika.com/」にアクセスしてダウンロードしてください。資料は PDF です。パスワードは「2023325」です。

日本個性化教育学会第 16 回全国大会　2023 年 8 月 5 日・6 日　オンライン（詳細は別紙）

テーマ　「多様な子どもの多様なニーズに応える教育の構想」

事務局への問い合わせ・連絡先

庶務部長　佐久間茂和

〒362－0064 埼玉県上尾市小藪谷 77－1　3－28－502

TEL　080－5429－1681

E-mail　sakuma.shigekazu@jcom.zaq.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ　https://koseika .com.

日本個性化教育学会 第 39 号

2023 年 5 月 14 日発行

編集責任者　事務局長　奈須正裕

編　　集　　中 澤 米 子